

# 水の源

MIZUNOMINAMOTO

2018

43

WINTER

巻頭インタビュー

## 「地域づくりは“感動”と“感謝”の結合」 ボーナスの出る村「やねだん」

自治公民館長 豊重哲郎さん



特集

## 第12回全国水源の里シンポジウム 農山漁村と都市の未来 ～これからの共生のカタチ～

京都府舞鶴市

水源の里レポート

## 移住・定住促進は第2ステージへ 島根県益田市の取り組み検証

## 第10回全国水源の里 フォトコンテスト 受賞作品発表

首長リレー連載

島根県津和野町

下森博之 町長

水源の里のうまいもん

## 京くれない 100% にんじんジュース

兵庫県神戸市

「ネバーランドの吊るし雛」

長野県根羽村

2019年1月中旬から約3ヶ月開催予定

村の観光施設「ネバーランド」にて毎年飾られる雛飾り「吊るし雛」。その数2000体にも上る。きらびやかに雛飾りが吊るされ、そのトンネルをくぐることで来訪者や女の子の健康を願う。吊るし雛のほかにも根羽村で昔から飾られてきた土雛人形など様々な雛飾りが展示される。

# 水源の里へ思いを馳せる

## ボーナスの出る村「やねだん」 「地域づくりは“感動”と “感謝”の結合」

とよしげてつろう  
やねだん自治公民館長 **豊重哲郎**さん

鹿児島県鹿屋市串良町にある集落、柳谷地区。約300人が居住する同地区は通称「やねだん」と呼ばれる。22年前の1996年、若干55歳にして地区の公民館長を任された豊重哲郎さん。彼がリーダーとなって、村おこしの取り組みが始まった。最初のころは「笛吹けど踊らず」の状態だったと豊重さん。補助金（行政）に頼らないこと、感動を共有することをモットーに賛同者も徐々に拡大していった。「東京ドームでイチローの試合を観戦する」を目標に地元の高校生とともに休耕田でサツマイモ栽培を始めたのを皮切りに、やがて芋焼酎「やねだん」の製造・販売に進化。そのほかさまざまな事業を成功させたことで全世帯122戸に1万円のボーナスを支給するまでとなった。地方創生の時代にあつて「やねだん」の名は集落ビジネスのモデルとして全国にとどろいている。

——Uターンで帰省されるまでの足跡をご紹介いただけますか？

高校を卒業したのが昭和35年。当時、地元で就職する人は実業系の高校に通った生徒が主でした。私は商業高校だった関係から銀行に就職することになりました。しかし銀行で高校卒業の自分と大学卒業で入行した者の差に愕然としました。給与はもとより昇進など、いくら頑張っても大学卒業者には勝てない。そこで故郷に帰って事業を起こす決意をしました。そのときが29歳でした。銀行から100万円借りて家を建て、ウナギの養殖を始めました。40歳からは蒲焼屋を開業。経済的には大変でしたが、それでも子ども3人を大学まで卒業させようやく55歳で借金を完済しました。さあ、いよいよこれからゴルフでも楽しもうかと思っていた矢先、町内会から「公民館長を頼む」と言う依頼が舞い込みます。高齢化率47%の準限界集落を私に託すから再生してくれ。集落の願いはそこででした。公民館長は輪番制で1年間。通常は65歳前後の人が順番に選ばれてきた。私が館長になったときだけ「選挙で決めよう」と言う意見が出て、選挙になり私が選ばれました。後から知ったことですが、

全部シナリオがあつて仕組まれていたんです（笑）。年配の女性が私の手を取って「テツローさん頼むでよ」と言うんです。みんなが同じ目をして私を見つめていました。集落の皆さんの気持ちに報いなくてははいけないとその時、本気に火が付きました。

——豊重待望論は集落の危機感の裏返しだったのでしょうか？

「やねだん」は、350年ほど前に7人の武士が入植して集落を開いたそうです。歴史ある集落が過疎や高齢化でどんどん疲弊し弱っていく。村人の誰もが淋しさと危機感を抱いていたのは間違いないと思います。でも、借金している時期にやれと言われていたら1年で辞めていました。集落から私が再生を託された理由は、29歳から55歳まで母校である中学校の男子バレーボール部を指導していましたが、事業をしながら大みそかも元日も返上でバレーを教えている姿を教え子や父兄、村の人たちは見ていたんでしょうね。心血を注いでバレーボールを指導してきた。そのパワーを集落づくりに向ければ、村は変わることができるという期待感だったと思います。

——集落づくりに手ごたえを感じた瞬間はいつでしたか？

「やねだん」の集会所の目の前には20㍍もの荒れ放題の土地がありました。この環境を変えるため、2年がかりで「わくわくする運動遊園」をつくらうと呼びかけました。完成式には地区出身者を含めて約300人が出席しました。来賓の町長は挨拶で「穴があつたら入りたい」と言ったんです。行政がつくつたら500万円以上はかかる施設を、集落の力だけでつくり上げたことへの賞賛の意味でした。そのあとの私の挨拶は、感極まり3分ほど声が出なかった。子どもからお年寄りまで村人が全員でつくり上げたものを目の当たりにし、「やねだんはこれからもやれる」と確信しました。

——村人を活動に呼び込むテクニックがあるのですか？

反目者はどこにでもいます。反目者は「やねだん」325人の1%、つまり3人。この3人が、ここぞと言う場面で声を上げて反対します。この3人を3年以内に感動で泣かすことができれば「やねだん」はなんとかなる。集落のために休憩所や卓球台、健康遊具をつくらうと提案し、丸太を提供してほしいと集落に呼びかけたとき、反目者の1人が「俺の山を使え」と申し出てくれました。人のためにという良心を引き出し、納得すれば協力してくれることを学びました。また、館長8年目に大腸がん入院しました。7時間がかりの大手術。術後、集中治療室にいた時、反目者の1人でバイクしか乗れない人が、小雨の中、五千円の見舞金をもって病院にきてくれました。その人が「哲郎、『やねだん』はお前がおらんと寂しい。早く帰ってこい」と言ったんです。私は涙を止めることが出来ませんでした。地域づくりは、感動と感謝の結合だと悟りました。

——「やねだん」の行き着く先、将来像は？

人口の若返りですね。集落のお年寄りは減っていきませんが、若者は高校までを集落で暮らし、都会に出て大学で学び、就職・結婚して、高校卒業後10年、20年後に1組か2組は集落に戻って子育てができる。持続可能で崩壊しない集落。これが「やねだん」が目指す将来像です。そのために必要な地域力として、文化や教育がメインのテーマとして備わっていないといけないと思います。具体的には、義理人情や充実した地域のシステム。また、当たり前なのなんたるかを学びながら育った経験を持つ人が大人になり、そして親元で子育てをするという循環。こういう循環を通じて「やねだん」は進化していかないといいないと思っています。最近では7組のUターン者があり、5歳以下の子どもが15人となって賑やかな村になり、喜んでます。

【聞き手・永井 晃】



# 移住・定住促進は 第2ステージへ（後編） 島根県益田市の取り組み検証

東京一極集中を是正し地方に若者を呼び込む取り組みは、地方創生の目玉施策となった。地方自治体にとって移住・定住政策は重点課題に位置付けられ、さまざまな支援制度が創設されるなど、田舎暮らしを希望する都市住民争奪戦の様相を呈している。

前号では、移住・定住に注目が集まる以前から、全国に先駆けて定住促進の取り組みに力を注いできた京都府綾部市の事例を通して、実際に移住・定住した人たちの現状と課題について検証し、今後の課題として「数の論理から質の追及へ」「集落づくりへの貢献」が浮かび上がってきた。

そこで今号では、島根県益田市の事例を通して「集落づくりへの貢献」の在り方について探ってみた。



## 地域に必要とされる存在に

島根県益田市<sup>ひきみ</sup>匹見町。同市街地から車で50分ほど、島根県の西南部、広島県と山口県の県境に接した中国山地の山間部に位置する。島根県の最高峰・恐羅漢山<sup>おそろかんざん</sup>（標高1,346m）をはじめ、1,000m級の高峰に抱かれ、中国山地を分水嶺とした七つの川が集まる匹見川が町の中央を流れ、みずみずしい自然が息づく秘境

の町、広葉樹林文化の薫る郷として知られる。

大阪府豊中市出身の福田正治さんが、この自然豊かな地を“終の棲家”として選び移住したのは平成27年4月。

「北近畿を中心に候補地はいくつかありましたが、妻の実家が広島県だったこともあり、最終的にこの町を選びました。退職後、気の向くままに身に付けたことが、ここではと

ても役立っています」

38歳のときに開設した設計事務所を57歳で後進に譲った福田さんは、フォークリフトや普通二種の運転免許に続き、運行管理者の資格を取得。さらに、認知症の母親を自宅介護した体験から、福祉・介護関連の勉強にも手を広げた。

「町に1社だけタクシー会社があるんですけど、ドライバーが足りない時にはピンチヒッターを頼まれた



匹見町の中心エリアに設けられた「交流の館 匹見」



子どもたちも気軽に立ち寄って自由に過ごす



遊び道具はすべて福田さんの手作り

り、介護者の会で講演を頼まれたり。高齢者サロンでレクリエーションのボランティアもしていますよ」

一生懸命な姿は、地域の人たちからの信頼につながる。1日に数本しかなく乗り継ぎの悪い路線バスを待つ間、1時間近くもバス停の椅子に座る高齢者のために、居場所づくりを提案。バス停のすぐ隣にある益田市の施設の一部を借りて「交流の館 匹見」を開設するに至った。高齢者が集う場としてだけでなく、地域の子どもたちが学校帰りや休みの日に訪れ、高齢者と将棋をしたり昔遊びを教してもらったりと交流の場になっている。

## 自立するための特産品開発

匹見町はまた、「ワサビ栽培」でも有名。かつては「東の静岡、西の島根」と称されるほどワサビの産地として名高い島根県の、中核を担っ

ていたのが匹見町であったが、約20年前からは匹見町のワサビは“幻のワサビ”となってしまっていた。

渓流水を利用して「沢ワサビ」を育てる匹見町のワサビ栽培は、人が沢に石をひとつひとつ積み上げた「渓流式ワサビ田」で行われる。栽培や収穫は、傾斜が急で狭い山道を分け入っての作業になることに加え、ひとたび大雨が降れば流されてしまうワサビ田の復旧作業は大変な重労働。高齢化や度重なる水害で多くのワサビ田が荒廃していき、徐々に出荷量が減少、いつしか「幻のワサビ」となっていたのだ。

しかしながら、思わぬ追い風が吹く。田舎暮らしに憧れて都会の人たちが地方に移住する「Iターン現象」だ。匹見町では、10年ほど前からワサビ栽培を志す若者の就農が始まり、荒廃したワサビ田の復旧や集荷に取り組んでいる。

当初は全国的に注目され、メディアや雑誌などでも取り上げられたから、ご存じの方も多だろう。

「荒廃したワサビ田の復旧は、起爆剤としては有効ですが、その次を見つけていかなければいけません」

福田さんが指摘するのは、自立。ワサビ田で頑張るIターン者のほとんどが、国か市の新規就農者支援助成金（毎月10数万円支給）に頼っているのが実情だが、給付には期限がある。いつまでも支援助成金に頼るわけにはいかないのだ。

そこで福田さんが取り組んでいるのが、特産品開発と商品化。

「匹見町の北端、広島県との県境にほど近いところに三葛という集落があってね。ほんとうに山深くで、昔は海苔が手に入りにくかったの、海苔ではなくてワサビの葉で巻いた巻きずしを作っていたんですね。それをぜひ復活させようと呼びかけ、皆で取り組んだんです」

復活といっても、目標はあくまでも特産品として商品化することなので、一年を通して生産・販売できる仕組みが大切。春先に収穫した柔らかいワサビの葉を塩漬けして使用する前に水で戻す、その塩加減や水で戻す期間などを探っていく。3年前に着手



新規就農のIターン者によって復活した匹見ワサビ



来年から商品化が決まったワサビ葉の巻きずし。益田市のマスコットキャラクター「ワサマル」にちなんで「ワサマル巻き」と命名



匹見町のワサビ栽培には険しい山道を登る作業も多い



沢に沿って敷き詰められた石の間に新しい株を植え付けていく

し、試行錯誤の結果、昨年ようやく完成。今年地元イベントで販売したところ、たいへんに好評だったので来年から商品化できるよう、一緒に開発に取り組んでくれた地元の人たちに段取りを伝えたという。

「もう、この歳ですし、私自身が商売をするつもりで取り組んだわけではありません。子や孫が帰省したときに小遣いを渡せるくらいに稼ぐことが、地域の活性化にとって大切だと思うんです。地域性というのか、伝統食が特産品になりますよってアドバイスだけでは地域の人は動きません。実際に、一緒に動いて見せることが大切なんです」と語る福田



休耕田を利用して整備したマシジミ養殖池

さんが次に着目するのが、マシジミ。かつては匹見町にも生息していたが、現在では皆無となってしまった。

「調べてみると、一般に流通しているヤマトシジミよりも栄養素も豊富なようですし、何より面白いのがマシジミは雌雄同体なんです。単純に考えれば、増えるスピードが速いということ。大量養殖できないかと、3年前から自宅で試験的に飼育しています」

試験飼育の結果、養殖できると確信した福田さんは、来年春から本格的な養殖をスタートさせるべく、休耕田を利用してマシジミの養殖池を整備した。近年、健康食品として注目されているだけに、養殖に成功すれば有力な特産品になる。

### これからの地域自治の仕組み

地域活性化のために特産品を開発して、「儲かる仕組み」をしっかりと確立することが大切だ。そうすれば、Iターン者だけではなく、いったんは出ていった地域の若者たちも戻ってきて活気づく……いわゆるUターンも念頭に置いた取り組みが大切だと指摘する福田さん。そんな福田さんの活動が目にとまったのか、昨年5月、ある会合のメンバーに加わるよう地域の公民館長から誘いが入る。益田市が進める地域自治組織の準備委員会だ。福田さんによると、地域のことを自治会だけに任せるのではなくて、学校やPTA、老人会やNPOなども加わり地域全体で考えていく新たな地域自治組織づくりを市が進めているとのこと。

そこで、益田市役所にて、政策企

画局人口拡大課の担当者にお話をうかがうと、同市が抱える地域の課題を解決しつつ移住・定住をスムーズに受け入れられる仕組みづくりであることが分かった。現在、益田市にある20地区それぞれにおいて取り組みが進められており、手順としては、[ステップ1] 準備会等の団体を結成、[ステップ2] 学習会、ワークショップ、アンケート調査などを実施、[ステップ3] 地区の将来像や定住の在り方を盛り込んだプランを作成、[ステップ4] 益田市が「地域自治組織ガイドブック」にある地域自治組織の6要件を満たしているかチェックといった4つのステップを経て、最終的に市が認定することになっている。

福田さんが住む匹見上地区は現在、ステップ3とのこと。終の棲家と決めた匹見町で地域活性化のため、あれこれ活動する福田さんの熱い想いが、「集落づくりへの貢献」に今後、どうつながっていくか、益田市の新しい取り組みの推移に今後とも目が離せない。

【文・竹市直彦】



匹見上地区で開催された地域自治組織の準備委員会の様子



各地区における地域自治組織の準備委員会とは別に、益田市では、市民と行政がともに地域の課題解決を図るための意見交換の場・学び合いの場として「まちづくりラウンドテーブル」が定期的開催されている

## 新たな地域自治組織づくりの概要 益田市「地域自治組織ガイドブック」より抜粋

### ●現在、地方都市の抱える課題

中山間地域においては、人口減少や少子高齢化の進展により、集落の小規模化・高齢化が進み、伝統行事や冠婚葬祭、環境保全などの共同作業が困難となるなど、集落機能の低下が進みつつあり、ひいては集落の存続自体が危ぶまれる事態にまで発展しつつある。

市街地においては、核家族化や価値観の多様化などにより共同体意識、いわゆる「地縁」に対する意識が低下し、連帯感が薄れ、集落活動参加者の減少や自治会未加入者の増加などにより、同じく集落機能が低下してきている。

### ●新しい動き

そうした課題の一方で、生活様式の変化や住民ニーズの多様化、住民

のまちづくりへの参画意識の高まりなどから、従来の地縁組織だけでなく、新たな市民活動の形としてNPO法人や趣味を通じた市民団体などが増えてきている。これらの団体は、社会情勢の大きな変化に的確に対応するための協働の担い手として、大きな期待を受けている。

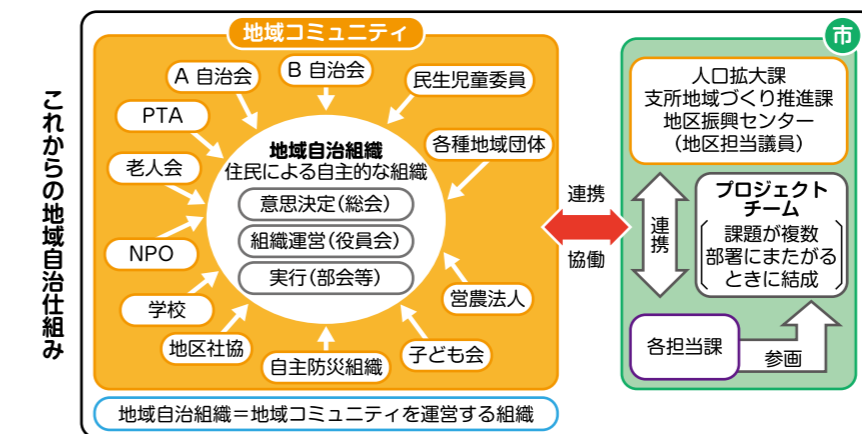
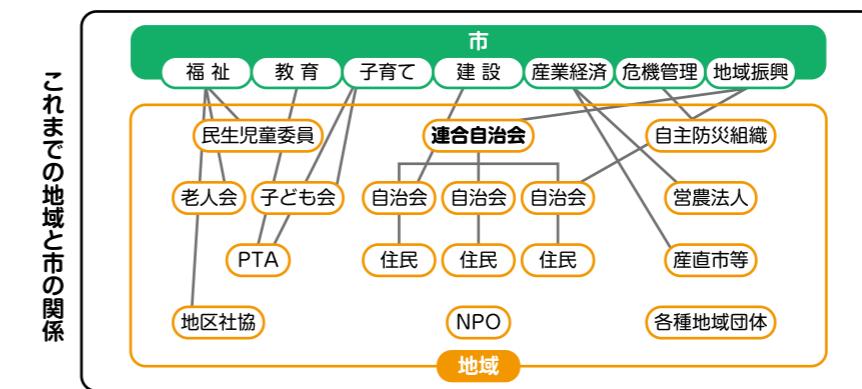
また、都会の価値観や生活様式に違和感を覚え、豊かな自然や田舎の伝統や生活に憧れて移住してくる人たちのなかには、地域には無かった新しい視点や技術、発想を持ち、地域づくりや地域貢献に意欲の高い人が少なくない。そうした新しい力を活用することが大切。

### ●新たな地域自治組織づくり

地域が抱える課題を解決し、地域コミュニティを維持していくために

も、従来の地縁による住民同士の結びつきに加え、地域の活動を支える市民団体との連携や世代、性別、立場を超えて話し合いや決めごとを行う仕組みをつくるのが大切。

また、移住・定住の受け皿となるのは地域である。地域がしっかりと定住者を受け入れる体制をつくり、帰ってきた人、初めて来た人がその地域に馴染み、住んで良かったと思えるような地域になる必要がある。地域をあげて定住者を迎え入れる取り組み、地域を元気で魅力あふれるまちにする取り組みが持続可能な地域の未来を描くことにつながる。行政と地域が一体となって人口拡大に取り組みでこそ、持続可能な地域の未来が描けるはず。



## 人口拡大・次世代定住の土台

※それぞれの団体はつながりが薄く、独自に活動し、そこに参加する住民もその都度その団体の顔で活動してきた。  
※行政は部局ごとに事業を推進し、団体ごとに個別に接するとともに、それぞれに組織化や役員体制をもとめてきた。  
※行政からのお願いや委託、補助という形で行政の取組を地域にお願いし、画一的に進めてきた。

※低下した集落機能を複数の集落がお互いに支え合うことにより、地域活動の維持、ひいては集落の維持にも繋がる。  
※様々な団体がつながって取り組むことにより、世代、性別、立場や主張を超えた組織となり、活動の幅が広がるとともに、後継者育成にも繋がる。  
※市が部局を超えて一体となって地域に対することにより、地域内の組織のスリム化や役員の減少につながることも、地域課題に対し、事業や制度を整理し的確に対応出来るようになる。

参照：これからの地域自治の仕組み (https://www.city.masuda.lg.jp/soshiki/21/1011.html)

## 特集 第12回全国水源の里シンポジウム

# 農山漁村と都市の未来

### ～これからの共生のカタチ～



東舞鶴高校生による庄巻の書道パフォーマンス

水源の里が抱える多様な課題と解決策を議論し、その果たす役割について考える「全国水源の里シンポジウム」。12回目を迎えた今回は、京都府舞鶴市で地元住民や全国の参画市町村などから約500人の参加者を得て盛大に開催された。今回のウォークルポは、2日間にわたるシンポの様子をレポートする。

### 開催地は京都府舞鶴市

シンポジウムの舞台となった舞鶴市は、かつては日本海側唯一の軍港として発展し、戦前の近代化を支えた赤れんがの建物と、戦後の引揚港として無数の再会のドラマを見てきた深い歴史に彩られたまちである。その風景は日本遺産に、引揚の記録



はユネスコ世界記憶遺産に登録され、人々の心に刻まれている。一方で、自然豊かな里山では、40年前から限界集落への危機感を持ち、都市住民との交流をはじめると、水源の里理念の起源ともいえる活動に先駆的に取り組んできた。

オープニングでは、京都府立東舞鶴高校書道部による書道パフォーマ

ンスが会場を沸かせ、大会はスタート。若い肢体が躍動し、書き出した言葉は「水魚之交」「晴耕雨読」。若人からの力強いメッセージに、シンポジウムへの期待が高まる。

実行委員長の多々見良三・舞鶴市長は「昨今の人口減少や社会動態の変化は、まちづくりに大きな不安をもたらそうとしている。今回のシンポジウムは、都市と農村の共生や関係人口について紐解き、全国の皆様と課題を共有しながら、まちづくりのヒントを考える機会として開催したい」と挨拶した。

### 農山漁村と都市の共生

基調講演には、東京大学名誉教授の大森彌さんが登壇。「農山漁村と都市の共生」と題して講演を行った。

大森さんは「共生」という言葉について、「一番大事なのは人と人との共生。自分と関係のある人がいなくなると生きられない、切っても切れない関係ということ。都市と農山漁村はそこまで強い関係性ではないが、お互いが依存しあっている。農山漁村が減れば都市は減る。これを都市にいる人たちが分かるかどうか重要」と指摘。人間がコントロールできない大自然と共に生きる英知を持った農山漁村の人々がいかに尊い存在かを改めて感じさせられる。続けて「農山漁村と関わる施策は、大きな意味を持つ。僕がもし文科大臣になるなら、子どもは農山漁村で暮らさなければ卒業させません」と悪戯っぽく笑い、会場を沸かせた。

さらに、それだけの価値を持つ農山漁村では、年長者が若者を追い出している現実があることにも言及。「住民が、その土地で生き抜く覚悟を持てるか。そして誇りを持って子どもたちに、いつか故郷に帰ってきてほしいと言えるか、そこが勝負」と訴えた。

また人口減少社会に必要な人材に



左/開会のあいさつをする多々見良三舞鶴市長  
右/会場には全国から約500人が訪れた



地元特産品ブースは来場者に好評。売り切れたところも

ついて、人工知能「AI」と対称させて「SI」（ソーシャル・インテリジェンス＝社会的知性）を紹介。どんなにAIが発達しても、コミュニケーションができ人と人をつなぐ協働のある人間は絶対に必要で、そういう人材をどうやって生み育て、活用できるかが今後の課題、と語った。

また、「水源の里のスローガン『上流は下流を思い、下流は上流に感謝する』これは非常にいい言葉。これからは『農山漁村は都市を思い、都市は農山漁村に感謝する』になっていくかもしれません」と締めくくる大森さんの言葉に、水源の里の取り組みがようやく時代のスタンダードとして地に足が着いてきたことを実感した。

### 関係人口という新たな共生

基調講演に続く事例紹介では、多々見市長による「広域連携・北部地域都市圏の取組」と、ローカルジャーナリストの田中輝美さんによる「関係人口という新しい共生のカタチ」が発表された。

田中さんは「定住はしないが地域

大森彌名誉教授は「農山漁村がなければ都市はない」と講演



に貢献したい」と考える都市部の若者が増加している現状を紹介。このような「観光以上・移住未満で地域に関わる人」を「関係人口」と定義づけ、その注目すべき可能性について説明した。「人口が増えない、拡大から縮小が当たり前になっている時代において、各地域が移住定住人口を奪い合っているのは未来はない。これからは地域の課題解決のために関係人口をいかに活かすかが問われている」と田中さんは話す。地域に関わりたいという人たちに、定住してもらおうとするのではなく、こういうことに困っているから、こう手伝っ

今も変わらぬ佇まいの舞鶴・赤れんが倉庫群

てほしいとお願いして、一緒に地域をつくっていく。そうしていく中で、住民は「諦めの払拭効果」が得られる。地域への誇りをもう一度育ててくれる効果があるということが、関係人口の力なのだ。

### 都市と地方が相互に思いやる

パネルディスカッションでは、福知山公立大学准教授の杉岡秀紀さんをコーディネーターに、地域の実践者である舞鶴市西方寺平の霜尾誠一さん、先に事例発表した田中輝美さん、「京都移住計画」代表の田村篤史さん、東京 23 区の区長で構成される特別区長会から事務局の菅野良平さんの 4 名により、シンポジウムテーマについて活発な意見交換が行われた。

霜尾さんは「子どもたちの教育の中に、地域の良さを教えていく科目が必要。都市と農村は、まだまだ水平ではない。地方の人々がいかに自信を持つかが課題。移住に関しては、田舎を知らない都会の人を批判する前に、教えたり理解しようとしたりすることが大事。自分たちと価値観の違う移住者から学んで、地域の悪い習慣は変えていくくらいの寛容さを持たなければならない」。

田中さんは「都市と地方の分断をどうやって壊すか。地方にいて感じるのは、関係人口がいるということ。地域の人たちが信じてくれないということ。地域の課題が魅力になり、その解決に貢献したいと思っている



今回の大きなテーマとなった「関係人口」を広めた田中輝美さん

都会の若者は実在するので、皆さん信じて一緒にやろうと言ってもらいたい」と力説した。

田村さんは「ただ田舎に帰るのがよいというわけではなく、地域に歓迎してもらえということが大事。地域側も“皆さんようこそ”ではなく、自分たちのまちにどういった人材が来てほしいのかを考える必要がある。そうすると、それに合わせた発信の仕方やメッセージが見えてくるのではないかと訴えた。

菅野さんは「地方創生でよく聞く『東京一極集中の是正、という言葉が、東京と地方の対立構造に置き換えられることが問題。どちらが勝ちか、どちらがいいかではなく、お互いが理解を深め課題を共有することを第一歩として、一緒にやっていくんだという共通認識を持つことが重要」と語るなど、それぞれの意見を披歴した。

コーディネーターの杉岡さんは

「理解するということが understand、下に立つということ。都市と農山漁村の共生を考える上で、お互いが相手を敬い感謝し、下に立つよう交流する、という意識が大切ではないか。逆風も向きを変えれば追い風になる。関係人口もそんなふうと考えていけたら水源の里はさらに元気になるのでは」と総括。会場からも時間内で取り上げきれないほど多くの質問がなされるなど、熱のこもった討論会となった。

### “天空の集落”名水の里杉山

シンポジウム翌日は市内 5 コースで現地視察が行われ、計 110 人が参加。今回、筆者は「平成の名水百選」に指定される自然湧水「大杉の清水」を活用した特色ある地域づくりに取り組む杉山集落を訪ねる「杉山コース」を視察した。

東舞鶴市街地から狭い山道を登るバスに揺られること 30 分、霊峰・青葉山の山腹に抱かれた杉山集落に到着。バスを降り立つと眼下には一面の雲海が。さながら“天空の集落”だ。ここからは、舞鶴湾が町より高い位置にあるように見えることから「逆さ海」が見られる名所といわれている。その神々しい景色に



第10回全国水源の里フォトコンテスト入賞作品の展示。作品めあての来場者も多い



パネリストからは、それぞれ熱のこもった意見が交わされた



雲海が広がる杉山集落



NPO法人「名水の里杉山」の取り組み事例を聴く



行者山の大神の祠で説明をする松岡良啓理事長

しばらく見惚れた。

名水の里杉山の取り組みについて NPO 法人「名水の里杉山」理事長、松岡良啓さんに話を伺った。杉山は現在 13 戸 43 人が暮らす小さな集落。いわゆる限界集落への危機感が募り、活性化の取り組みを始めたのは、平成 12 年から。増大していた耕作放棄地を復旧し「市民農園」を開発。外部から 27 組を募り始まった農園利用者との交流は、「市民農園収穫祭」「グリーン・ツーリズム」「キャンドル・イルミネーション」「農園コンサート」といったさまざまな催しを開催するきっかけとなった。そこから少しずつ、住民も地元で自信と誇りを持つようになり、地域の魅力を再発見・再評価するワークショップを重ね、平成 16 年には杉山の地域資源をまとめた「地域構想図」を作成した。

### 関係人口の活用モデル地域

平成 17 年には、地域構想を実現すべく NPO 法人「名水の里杉山」を設立。手作りの石窯のパン工房と併設した「杉山茶房」では、地元食材を使ったパンやピザなどの料理体験ができ、ふるさとボランティア活動では「わさび田」と「水車」を復活させた。さらに、棚田米と名水を利用した一大プロジェクトとして、宮津市のハクレイ酒造と共同で地酒を開発。純米吟醸「大杉」として初年度 3600 本を製造販売したところあっという間に完売し、成功を収めた。現在も毎年 3500 ～ 4000 本を限定生産しているが、そのほとんどが予約時点で完売するほどの人気ぶりだという。

これらの活動は都市住民との交流から広がり、今年年間 2500 人もの

人が全国から訪れるというが、地域に定住した I ターン者は一人もいないという。平成 28 年にオープンした農産加工場兼農村レストラン「名水杉山茶房」でも地域住民と舞鶴市内からのボランティアで運営されている。移住者がいない理由については、市街化調整区域の問題や住民理解が進んでいないことなどが挙げられた。定住にさまざまなハードルを抱える杉山で、地域活性の原動力となっているのはまさに“関係人口”であり、全国の水源地のモデルとなる集落の底力を感じる視察となった。

【取材・文 白波瀬聡美】



左／集落を歩いて散策。美しい棚田の風景が広がる  
上／集落の元気の源、杉山茶房ボランティアスタッフのみなさん。舞鶴市内から通っている人も  
下／名水「大杉の清水」を使った純米吟醸「大杉」





# 美しい高津川を いつまでも

## 津和野町の誇る高津川

津和野町を流れる高津川は、隣接する吉賀町に源を発し、本町から益田市を経由して日本海に流れる延長81キロ、ダムのない一級河川です。国土交通省の水質調査で過去何度も日本一に選ばれるなど、その清らかな流れは、長い歴史において自然との共生を大切にしてきた流域住民の生活の象徴であり、私たちが郷土愛を醸成する重要な財産でもあります。

一方で、本町においても慢性的に続いている人口減少や社会の変化は、少しずつ人と自然とのよき共生のバランスを崩し始めており、川を育む森林の荒廃が進みつつあります。こうした中、平成25年に本町は甚大な豪雨災害に見舞われ、その際の山林の崩壊が被害を増大させる事態となってしまいました。

## 美しい森林づくり条例

こうした辛い出来事を顧みながら、今一度災害に強い森林を整備することの重要性を認め、平成28年に「津和野町美しい森林づくり条例」を制定いたしました。美しい森林づくりとは、町内の森林が地域の生態系と調和してバランスよく整備

され、多面的機能を十分に発揮する状態になるよう取り組むものと定義し、それを達成するために、町、町民および森林に関わるすべての人々が連携協働するべく、町の責務と町民の役割等を明確化しております。

同時に、条例に基づき具体的な行動を起こしていくための「津和野町美しい森林づくり計画」を策定するとともに、先駆的な能動者となっていただくことを目的に自伐型林業の推進に取り組んでおります。現在、若いU・Iターンの方々の本町の自伐林家として成長し、美しい森林づくりを推進するスタートを切ったところでもあります。

## 水源の里の魅力为全国へ

また、本町が目指す美しい森林づくりのモデルとなる理想林を町有林に指定し、町民に分かりやすく理解を深めるとともに、交流協定を結んでいる東京都文京区との友好の森として、都市住民との交流を進めながら、都市とは対極にある水源の里の存在意義や重要性を理解していただく活動も積極的に行っております。

津和野町は、古くから「山陰の小京都」として多くのお客様を迎える観光地でもあります。津和野観光の



魅力は、豊富な文化財の数々、また城下町の街並みとそれらを取り囲む里山などが一体となって「日本の原風景」を思わせる景観の素晴らしさであると自負しております。美しい森林づくりが全町的に広がりを見せるにしたがって、観光資源としての輝きがさらに増し、「水源の里」の魅力が全国に発信できるものと期待しているところであります。

現在、わが高津川を舞台とした映画の製作が錦織良成監督により進められております。源流から下流まで四季折々にさまざまな表情を見せる美しい景観とともに、長い歴史において高津川と共に生活を営んできた流域の誇りある人間性や文化をも多くの皆様にご覧いただきたいと願っております。



本町通りの風景はまさに小京都



殿町通りの堀割には、400匹ほどの鯉が泳ぐ



災害に強く、美しい森をつくる自伐型林業



全国一位の水質と認められた高津川での鮎釣り

第10回

# 全国水源の里 フォトコンテスト

## 10回目の水源の里フォトコンテスト、過去最高の応募数、682点が集まる

「水源の里」らしい生活や文化、四季折々の表情などを収めた作品を募集する、全国水源の里フォトコンテスト。記念すべき10回目は682点、応募人数255人と、過去最高の応募数となりました。

9月に行われた審査会では、机の上に広げきれないほどの作品が並びました。審査員からは「作品の質が格段に良くなった」との声が。厳正な審査の中選ばれた今年のグランプリ(1点)、各大臣賞(3点)、特選(10点)をどうぞご覧ください。



審査員 たぬまたけよし 田沼武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長) / わしだきよかず 鷺田清一(哲学者、京都市立芸術大学理事長・学長)



『精霊の天精』  
西岡季子さん  
(高知県高知市)  
撮影地:高知県本山町

[選評・田沼] 水と少女、この二人の顔が見えないところが素晴らしいですね。ふつうだとニコツとした笑顔を狙うのですが、水面に顔を付けて魚を探しています。顔を見せないことで想像力をかり立てます。少女が自然の中に溶け込み夢中で遊ぶ光景が、いかにも水源の里にふさわしいと思い選びました。



『泥んこ競走』  
磯 敏且さん  
(群馬県利根郡  
みなかみ町)  
撮影地:群馬県高崎市

[選評・田沼] 泥んこも水です。人間は水がなければ生きていけませんね。日本は水が多いのでありがたみを感じない人が多いようですが……。この新婚カップルの競争の写真は、外国の方が混じっているところに、現在の日本を象徴するような写真になったと思います。昔は外国の方がいるということは珍しかったのですが、日本も国際的になったのでこういうことも自然なこととなったと思います。泥水の中で人生を楽しんでおり、コンテストにふさわしい作品です。



『見廻り』  
長 吉秀さん  
(福岡県福岡市)  
撮影地:宮崎県  
日之影町

[選評・田沼] 田んぼの写真は、応募される作品の数としてはとても多いのですが、この写真には犬が入っています。田んぼで犬が遊びまわり、作者の目の前に現れた光景が動画を見るようすばらしいと感じました。犬がいるかないかで、受賞が決まったと思います。日本の農村の生活を感じさせる写真だと思います。





『斐川平野の夜明け』  
西尾 透さん  
(島根県益田市)  
撮影地: 島根県出雲市

[選評・田沼] 「美しい日本」を代表するような作品だと思います。作者によると島根県出雲市の典型的な風景とのことで、築地松という300年の伝統を持つ防風林だそうです。朝焼けに織物が透けて見えるようで、極めて写真的で、絵画的な構成で、荘厳さを感じます。水田があるために風景が写りこんでいますが、水がなければこのような風景は出来上がらなかったらと思います。



特選  
『砂浴び』  
五十嵐敏紀さん  
(秋田県横手市)  
撮影地: 岩手県遠野市



特選  
『つかまえたー』  
古林邦夫さん  
(兵庫県豊岡市)  
撮影地: 兵庫県豊岡市



特選  
『里山の夜明け』  
木全雅裕さん (名古屋市緑区)  
撮影地: 新潟県十日町市



特選  
『冬湖を楽しむ』  
西村俊裕さん (兵庫県三田市)  
撮影地: 兵庫県三田市



特選  
『視線』  
蘓理忠則さん (京都府福知山市)  
撮影地: 京都府綾部市



特選  
『燦火』  
吉野耕司さん (京都府舞鶴市)  
撮影地: 京都府舞鶴市



特選  
『逃がさない。俺の鯉だ。』  
上條高司さん  
(長野県松本市)  
撮影地: 長野県木祖村



特選  
『大混乱』  
小倉正紀さん (京都府宮津市)  
撮影地: 京都府福知山市



特選  
『清流』  
藤野治雄さん (千葉県市川市)  
撮影地: 北海道京極町



特選  
『故郷の風景』  
杉瀬 豊さん (大分県大分市)  
撮影地: 大分県豊後大野市

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は ▲全国水源の里連絡協議会 『水の源』編集委員会  
綾部市役所 定住交流部 定住・地域政策課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1  
TEL: 0773-42-4271 FAX: 0773-54-0096 E-mail: teijyutiiki@city.ayabe.lg.jp  
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ 『水の源』を年4回お手元にお届けします。年間購読料 1,000円 (送料込)  
お申し込みは、上記の電話、ファクス、メール、ホームページから



リコピンにんじん「京くれない」をまるごと搾った健康ジュース

# 京くれない100% にんじんジュース (200ml) 380円 (税込)



**かみかわちょう 神河町**

面積 202.23 km<sup>2</sup>、人口 11,454 人。兵庫県のほぼ中央に位置するハート型のまちで、平成 17 年に神崎町と大河内町が合併して誕生。町域の 8 割を山林が占め、千町ヶ峰を筆頭に千ヶ峰・眺晴山など 1000 m 級の山々に囲まれている。峰山・砥峰高原は関西地方でも有数の高原地帯で、特に一面にススキが広がる風景は秋の風物詩として多くの観光客を魅了している。

アグリノベーション神河株式会社  
 〒 679-2413  
 兵庫県神崎郡神河町中村 126-3  
 Tel. 0790-32-0850 Fax 0790-32-0851

「京くれない」にんじんは、通常よりも鮮やかでツヤのある赤い根色が特長で、一般の品種に比べリコピンを豊富に含む機能性野菜と言われています。トマト等に多く含まれるリコピンは、血液中の活性酸素を除去する抗酸化性にすぐれ、生活習慣病の予防や老化防止、女性にうれしい美肌効果など、美容と健康にさまざまな作用が期待されています。

作付けを開始したのは 2 年前から。味は良いが規格が出荷レベルに及ばなかったため、ジュースとして加工することに。すると、その美味しさが口コミで広がり、売り上げは予想以上に好調！ 昨年は 1 万本を他県の会社に外注して製造しましたが、今年は 2 万本への増産を目指し、

自社工場の建設も計画しているそう。原材料の栽培から製造、販売までを町内で産業化し、地域経済の活性化を図るとともに、ゆくゆくは町の特産品にしたいと担当者は話します。

美容にも良いと聞き、嬉々として一口。にんじんをまるごとすり下ろしたようなトロトロとした口当たりは、飲むより「食べる」という感覚。にんじん臭さや苦みなどはなく、トマトジュースに近い爽やかさで、砂糖不使用なのにとっても甘い！ 食品添加物ゼロの、体が喜ぶ自然派ジュースは、スムージー感覚で朝食の一品として、また乳児の離乳食としても活躍しそうです。

【文・白波瀬聡美】

## 読者プレゼント



### 京くれない100%にんじんジュース(200ml 3本入) 3名様

- アンケート
  - Q1. 面白かった・関心を持った記事は何ですか？
  - Q2. 今後取り上げてほしい内容はありますか？
  - Q3. お住いは水源の里(限界集落)ですか？ またそれに関わらず、地域で解決したい問題があれば教えてください。
  - Q4. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

- プレゼント応募方法
 

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、『水の源』編集委員会『水の源 43 号』読者プレゼント係までご応募ください。

【平成 31 年 1 月 21 日 (月) 消印有効】

※当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。  
 ※ご応募いただいた方の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。

## 参加募集

世代間・異業種交流に関心のある人たちが集合

地域振興に関心のある人たちが集合

社会教育、青少年教育の振興に関心のある人たちが集合

# Reborn こころの ふるさと フォーラム 2019

～今こそ農山漁村と  
都市との連携と共生を～

2019(平成31)年  
**3月2日(土)～3日(日)**  
日本青年館 東京都新宿区霞ヶ丘町4-1

**日本青年館までのアクセス**

- 電車でお越しの方
  - 東京メトロ丸の内線 外苑前駅3番出口 徒歩5分
  - 都営大江戸線 国立競技場駅A2番出口 徒歩10分
  - 中央線・総武線(各停) 千駄ヶ谷駅 徒歩12分
  - 中央線・総武線(各停) 信濃町駅 徒歩12分

**参加要領**

募集締切—2019年2月21日(木)

定員—100名

参加費用—参加費：3,240円 宿泊費：1泊7,560円 (全て税込) 情報交換会費：5,000円

お申込み—裏面の申込書にお名前、職業・所属、年齢、住所、電話番号、メールアドレスをご記入のうえメールまたはFAXでお申込ください。

■主催—日本青年団協議会、一般財団法人日本青年館「Rebornこころのふるさとフォーラム2019」実行委員会

■事務局—日本青年団協議会

■後援(予定)—全国都道府県協議会、全国知事会、全国市議会議員会、全国市長会、全国町村議会議員会、全国山村振興連盟、公益財団法人日本離島センター、一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構、一般社団法人共同通信社、オーライ！ニッポン会議、一般財団法人地域活性化センター、公益財団法人あしたの日本を創る協会、日本社会教育学会、社会教育推進全国協議会、公益社団法人全国公民館連合会、公益社団法人全日本郷土芸能協会、全国社会福祉協議会、中央青少年団体連絡協議会、特定非営利活動法人地域交流センター、公益財団法人日本青年会議所、公益財団法人社会教育協会、日本放送協会、株式会社時事通信社、日本経済新聞社、読売新聞社、全国地方新聞連合会、中日新聞東京本社(以上予定)

**趣旨**

私たちの社会構造に様々な歪みが生じてきました。人口の流動化、都市化の進展で生まれた日本列島の過疎化/過密化、そして、総人口のわずか4%という農山漁村に対して、依然として進む東京圏、大都市圏の人口集中。疲弊した社会構造が、農山漁村のみならず、都市部の人々の生き方にも不安を与えています。その一方で、若者を中心に「田舎回帰」や「地元志向」の流れが生まれ、地域力を支えてきたつながりや「こころの空洞化」の回復にも結びついています。

「Rebornこころのふるさとフォーラム2019」は、それぞれの立場で地域づくりの現場に携わる人たちが集い、学習や交流を通じて、課題を深めるだけでなく、参加者同士をつなぐ新たなネットワークの構築、活動の輪を広げ、地方創生の国民的運動の構築をめざしています。本フォーラムの実行委員会と事務局団体を担う日本青年団協議会は、地域にねざす「青年団」の全国組織として、戦後一貫して地域づくりを通じた若者の自己成長、集団形成、世界平和の理念を大切に、広い分野にわたり活動に取り組んでいます。その中には、アジアをはじめとした海外の人とも古くからつながってきた交流の歴史をあわせもちます。

今、複雑な社会構造の中にあふれる様々な地域課題や生活課題を解決していくために、あらゆる立場の人たちが連携し、人々と連携していくことが、改めて求められています。ぜひ、本フォーラムを通じて、大地と共生し、いのちやくらしの根っこにある「ふるさと」を見つめ、生きにくさや生きづらさを抱えるからこそ、一人ひとりが幸せに、いきいきと、豊かに生きていきかけにしていきたいと思います。

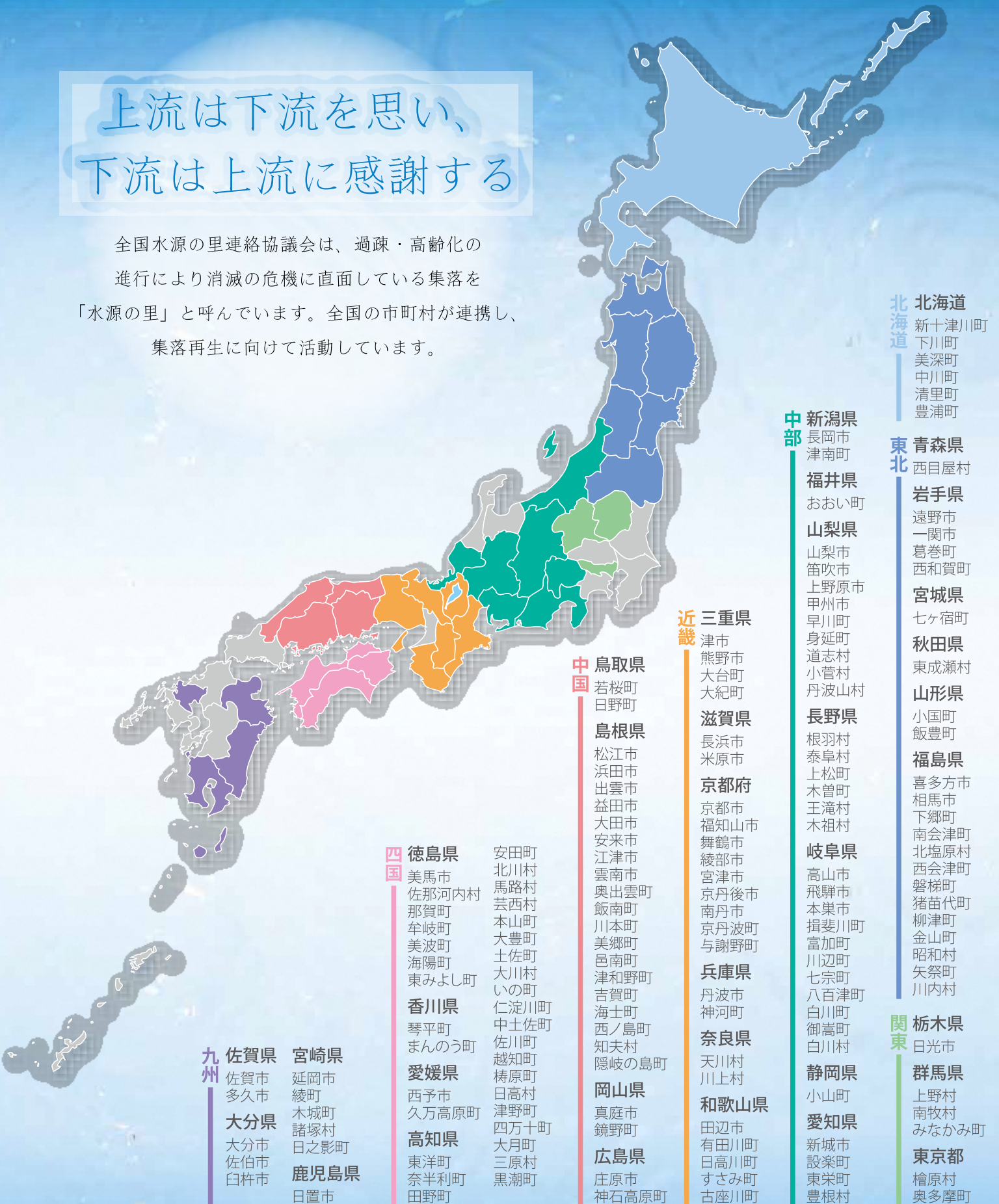
日本の元気は、地域から 地域の元気は、若者から—

※一部のプログラムは「第64回全国青年問題研究会」と合同で開催します。

出会う、集って、つながって  
日本の元気は、地域から 地域の元気は、若者から—

# 上流は下流を思い、 下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。



私たちは水源の里を  
応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会  
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会  
全国森林組合連合会

全国農業協同組合連合会  
電気事業連合会  
独立行政法人 水資源機構

独立行政法人 水資源機構  
公益社団法人 大分県薬剤師会